

# 景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2018-12-01

特集 韓国の景観の今  
～第4回日韓都市デザイン交流会  
を通じて～



Picture : Seoul Culture Tank (Mapo)

## 目次

P1  
 ■巻頭  
 「韓国の都市再生の動きと今後の課題」  
 ／(写真・文) 李 錫賢

P2～6  
 ■TDA NEWS  
 《日韓都市デザイン交流会 2018 in KOREA》  
 「日韓都市デザイン交流会報告」  
 ／矢内 匠  
 「韓国における公共デザイン政策」  
 ／倉田 直道  
 「環境色彩計画から見た韓国」  
 ／吉田 慎悟  
 「韓国の照明デザイン」／近田 玲子  
 「日韓都市デザイン交流会・広州市  
 報告」／中野 恒明

P2～3  
 ■ランドスケープ事情  
 「都市再生のための住民参加のオー  
 プンスペースデザイン事例」  
 ／尹 眞玉

P6  
 ■シリーズ：地域から  
 「行田市」その2 ／朽木 宏  
 ■景観ビジネス最前線  
 ／大成ロテック(株)  
 ■ホワイトボード

## 韓国の都市再生の動きと今後の課題

10年前から本格的に始まった韓国都市デザイン改善の流れは、最近都市再生に移り、多くの場所で様々な試みが為されている。これはマンション開発を中心とした都市整備のあり方が、地域のコミュニティを弱体化させ、景観的にも魅力のない都市をつくり出した反省から、個性ある都市をつくらうとする動きでもある。最近、政府も国家政策の重要な方針として、地域再生や衰退した地域の活性化を掲げている。その成果として世界的に例がない大胆な都市再生事業や中心市街地活性化事業等、景観整備を伴う事業が全国に拡大している。ソウルにおいても既存の石油タンクを用いた文化基地の再生、老朽化した高架道路を散歩路として再生、そして古い建物を活用し創造センターとして再生する事業等が実施されている。国が都市再生の重要性を自覚し、自らが都市デザインの政策をつくり出していることは歓迎すべきことである。

このように国が持続可能な都市の再生を目指すことは心強いが、我々はこれまでの多くの都市が、急速に発展したために、それぞれの地域が持っていた個性的な魅力を失ってしまったことを忘れてはならない。都市再生の根本は、物理的な環境の回復を通じて都市が持つ魅力を取り戻す意味もあるが、その再生の主体となる人々との関りや地域に対する愛情など、目に見えない文化の継承でもある。それは短期間につくられるものではない。時間を掛けていろいろな議論を行い、その理解の蓄積が重要である。日本の様々な都市再生の事例を見ると、住民参加や地域の文化に対する深い理解がなければ、再生は持続しないということが明確である。都市再生を牽引する市民リーダーの育成は韓国でも日本でも重要な課題となっている。このような時代は、専門家と行政の力だけでは今まで以上により都市をつくることは出来ない。本格的に市民と協働して地域再生の計画づくりに着手し、よい成果を生み出す事例をつくり出すこと必要である。またこのような計画の中では文化の多様性を活用することは当然なことであり、その活用が今後の新たな再生の成否を決める。

新たな都市の再生を目指すこの時代にこそ、国境を超える専門家の知恵と協力が必要となる。都市再生はすでに一つ国の問題ではなくなった。今後、韓日都市デザイン交流会の活動はさらに重要度を増すであろうし、具体的な計画の分野でも深い協働が必要とされるだろう。韓日都市デザイン交流会でこれまで行ってきた見学中心の交流と共に、景観計画や都市再生計画においても協働が広がっていくことを期待している。

韓国中央大学教授 リー ソクヒョン  
李 錫賢

## TDA 交流イベント 日韓都市デザイン交流会 2018 in KOREA

4年目を迎える日韓都市デザイン交流会は、きわめて個人的な交流から、次第に多様な交流につながりだしている。今回はTDAの様々な専門家が日本から参加した事もあり、専門家諸氏の目を通した韓国の景観デザインの現状を報告してもらった。



●訪韓 TDA メンバー（左から 吉田愼悟、近田玲子、倉田直道、矢内匠、中野恒明、国吉直行、右端は出迎いのチェさん（元スウォン市都市デザイン課長）

## 1 日韓都市デザイン交流会報告



矢内 匠  
自治体職員

／TDA 正会員

日本と韓国の第4回目となる日韓都市デザイン交流会は、今年は韓国で開催された。この交流会に、日本からは6名が参加し、廣州市、龍仁市でそれぞれ開催されたフォーラムに参加した。

### ■10月4日

ソウル金浦空港に集合し、廣州市（京畿道）に車で移動、世界遺産の南漢山城を視察。その後、廣州市の中心部を視察。国の都市再生特区に指定され、3年で150億ウォンの国からの支援を受け、学校や図書館、公園やそれらを結ぶ道路空間や通学路等の整備が予定されている。

フォーラムでは、日本側から中野氏が、歴史と文化に配慮した都市景観形成として、門司港の整備事例を中心に、近田氏は、地域の個性を生かした照明デザインの方向性として、豊田市街の照明デザインや金沢市の照明デザイン等の事例を紹介した。ディスカッションでは、参加者からの質問を日本の登壇者が答える形となり、歴史的な景観を残すべきか、車と人の関係性について等を日本の事例を紹介しながら質問に答えた。参加者は、自治体職員だけでなく、地元市民も多く参加されていた。

### ■10月5日

ホテルから、この日の開催場所となる龍仁市に移動した。龍仁市は、ソウルから約

40kmに位置し、ソウルのベットタウンとして、近年人口が急増している。最初に、龍仁市の下水処理場（Suji Respia）の視察を行った。施設は住宅街の中にあり、処理施設を全て地下化し、上部をグランドや公園として活用され、芸術ホールの文化施設を併設している。その後、移動し、韓国民族村を駆け足で視察した後、龍仁市役所のホールでフォーラムを開催。日本側から、倉田氏が、アメリカと日本の景観コントロール手法について、吉田氏からフランスと国内の団地再生の色彩計画について解説を行った。討論会では、韓国内の専門家が登壇し、住宅地域の高密度化によるコミュニティの崩壊や公園敷地の確保、近代建築の価値や保全の意識が低いなど、国内の問題が提起された。

来年は、韓国のデザイン関係者が来日し、また熱い議論を行う予定である。



●廣州市デザインフォーラム集合写真



●龍仁市デザインフォーラム集合写真

## ランドスケープ事情

## 都市再生のための住民参加のオープンスペースデザイン事例



図1 バス停シェルター改善事業前と後（資料：ソウル市庁）



図1 1.現場のワークショップのご案内 2.遊び場で遊んでいる姿 3.現況マップを作成する 4.グループ別の遊び場計画

日本と同様に韓国においても土地利用計画や開発事業の推進時に適用される法制度は、オープンスペースの量的確保に貢献した。しかし、関連法規で要求される量的基準による確保及び供給に重点を置いてしまい市民に日常的に利用されない空間も多く造られた。さらに、最大の問題点はオープンスペースの位置とアクセスである。特にアクセシビリティを高めるために開かれた空間の進入部領域を過度に強調してはならず、内部の施設を最小化し、開放感を高めるなど、デザイン面の考慮が重要である。

韓国国内では、都市の衰退地域の活性化のために都市再生事業が各地で展開されているが、その推進は円滑ではなさそうだ。都市再生事業の対象地として選定になっても一気に行われるのではなく、手続き上で、少なくとも3～5年をかけて推進する必要があるため、住民の立場では、事業の進行がよく見えず、住民の事業への参加度や関心度が低い現状となっている。

都市再生事業の推進には、地域の様々な事業活動を支援する機関を通じて行う住民自治の活動支援と共に、地域内のオープンスペースの整備と拡大を先に進めることが望ましいと思う。日常生活の中で簡単にアクセスすることができるオープンスペースを介して、住民同士のコミュニケーションを促すことで他人に配慮するという成熟した文化の上で都市再生事業は、成り立つものであり、これこそが真の都市再生と思われる。

紹介する2つの事例は、都市再生の事業として、オープンスペースのアクセシビリティを高めたものと住民参加によるオープンスペースのデザインに関するものである。特に後

# 2

## 韓国における公共デザイン政策



倉田 直道

工学院大学名誉教授  
TDA 代表理事

日韓都市デザイン交流会の縁で、11月11日に韓国の江原道春川市で開催された公共デザインフォーラム2018に参加した。近年、韓国政府やソウル市などの自治体がデザイン政策に力を入れていることは承知していたが、商品などのブランド力、競争力を強化するためにデザイン的な付加価値を加える産業の振興政策といった理解であった。しかし、今回の公共デザインフォーラムに参加し、韓国において、公共デザイン政策がまちづくりや都市再生を推進する上で大きな原動力となっていることを知る機会となった。

韓国では、2007年に景観法が制定され、2016年8月に公共デザインの振興に関する法律（公共デザイン法）が制定されている。公共デザイン法は、「公共デザインの文化的公共性と審美性の向上に必要な事項を定めることにより、国や地域のアイデンティティと品格を高め、国民の文化の楽しみを増大するために寄与すること」を目的とした国の法律である。それまで韓国における公共領域におけるデザインの取り組みは、景観の管理に重点を置いた景観法の細部としての扱いに留まっていた。また、工業デザインとの違いを巡っての議論を経るなど複雑な関係の中で、その役割は明確に規定されてこなかった。一方、地方

自治体においては、景観法に基づく条例より、法制化されていない公共デザイン関連条例の数の方が多く、その必要性は益々大きくなっており、最終的に公共デザイン法が制定されることになった。

公共デザイン法において「公共デザイン」は、一般公衆のために国、地方自治体、公的機関が計画・整備・運営又は管理する公共施設等について、公共性と審美性の向上のために設計する行為及びその結果と定義づけている。さらに、国及び地方自治体の責務として、公共デザインの振興のために必要な施策を策定し、必要な財源の拡充と運営のために努力しなければならないとしている。国及び地方自治体は、それぞれ公共デザイン振興総合計画を策定するとともに、公共デザインの振興に関する事項を審議、調整するために公共デザイン委員会を設置するとなっている。

今回の公共デザインフォーラムでは「デザインで都市問題を解決する」をテーマとし、私を含む、デザイン、まちづくり、行政の専門家による基調講演、事例報告の後、報告者に春川市市長が加わり、公共デザイン学会長の司会でパネルディスカッションが行われた。具体的な事例を通して、このフォーラムで強調されたのは、「公共デザイン」は特定の専門家だけの作業ではなく、社会全体が参加する共同作業であり、公共デザインを通して社会問題を解決し、公共の場を美しく快適にすることで「より暮らしやすい都市」としての競争力を向上させることを目指すということ

あった。デザインは、単に製品や空間の美しさを改善する段階を越えて、都市が直面する課題解決の活動にその領域が拡大している。さらに、都市の文化的力量を育てるうえでも重要な役割を果たしている。

デザイン的思考とは、より良い結果を得るため、課題を実用的かつ創造的に解くためのプロセスであり、韓国で顕在化している社会的現象や文化的、経済的、環境的变化に応じ、デザインを通して社会の公共的価値を向上させるための、計画、戦略、政策、実行、管理の統合的方法論でもある。また、公共デザインの基本原則として、1) 公共の利益と安全を最優先に考慮し、美しく快適な環境を整備する、2) 年齢、



● 東大門デザインプラザ歴史公園



● 歩行者専用道路「ソウル路」

(株)オープンスペース E&D : 代表 尹 眞玉



図3 遊び場の改善の子供参加ワークショップとマスタープラン

者は、住民参加の拡大案として、地域の子供たちが直接遊び場を計画する過程を示している。

最初はソウル市が実施しているオープンスペースの再生事例として「72時間都市いきいきプロジェクト」を通じて、2018年に優秀賞を受けたものである。バス停の後ろに位置しているのに、あまり利用されていなかった暗い空間を、開放感を高め、明るい雰囲気へと変えた。バス利用者でなくても、住民や街路の歩行者が容易にアクセスし、休むことができる空間に変貌させたものと評価された(図1参照)。

図2は、世界文化遺産である水原華城の近くに位置している旧都心地域の遊び場を改善する過程として利用者である子供たちのニーズやアイデアを発掘するための参加型デザインワークショップを運営したものである。区域内の10代の子供20人と行政職員と専門家10人余りが一緒に現場を訪問し、直接遊んだり、子供達の行動を観察することによって、問題点を把握した。グループ別に調査した内容は、室内のワークショップでの現状マップ作成を介して整理され、問題の解決と共に奇抜なアミューズメント施設が参加者によって提案されて配置することになった。子どもたちは、自分たちだけのスペースでなく、大人のためのスペースも必要であり、これに対するアイディアや配置まで提案した。この事例は、遊び場という空間の特性上、子供たちを参加させたが、都市再生事業の推進において、地域内の様々な空間やそれらの課題を解決するためには、最も適切な対象者が参加すべきであると考えられる。(日本語訳: ㈱オープンスペースE&D 盧 京珍)

性別、障害の有無、国籍などに関係なく、すべての人が安全で快適に環境を利用することができるデザインを目指す、3) 国・地域の歴史やアイデンティティを表現し、周囲の環境と調和、バランスをとる、4) 公共デザインに関する国民の意見を積極的に集約し、意思決定プロセスに国民が参加できる様々な方策を用意する、などを挙げている。

### 3 環境色彩計画から見た韓国



吉田 慎悟

武蔵野美術大学教授  
色彩計画家 / TDA 副代表理事

今年の日韓都市デザイン交流会は10月4日と5日にソウル近郊の廣州市と龍仁市で開催された。交流会では会議に費やす時間が多かったために、まちの見学はわずかだったが、それぞれの市の担当が都市デザイン上の問題点も話しながら、案内してくれて興味深かった。

廣州市と龍仁市のまちを見ると、色彩は日本と同様の問題を抱えていた。韓国でも都市化が急激に進み高層建築増え、経済性を優先した近代的な都市景観をつくりつつあるが、そこには地域の個性は薄く、何処も同じような景色になっている。また旧市街地は人が多く、活気があってそれなりに魅力的だが、その個性が認められ、育成されているわけではなく、何処にでもあるような経済的に有利な高層住宅に変わってしまう。韓国で近年建設されている高層住宅の色彩は、穏やかになり景観の阻害要因は減ったようにも見えるが、地域の歴史と繋がった個性は感じ難い。この問題は急激に都市化するアジアの都市に共通しているのかもしれない。

最初に訪れた廣州市の市街地は、雑然としているが賑わいがあり、歩いて楽しい雰囲気があった。さらに複雑に入り組んだ煉瓦で揃った住宅街も見つかり、その住宅群に私たちは魅力を感じた。その魅力をうまく残していくべきではないかと市の担当者

に述べると、煉瓦の住宅は古く汚く感じているようで、私達の意見は意外だったようだ。そのような低層の煉瓦造りの住宅とは対比的に、街の中心部には大きなショッピング施設も入る超高層住宅の建設が既に行っていたが、その計画を私達には魅力的に映らなかった。たとえ今、古く見えても、地域が育んだ特徴ある景観を活かして繋いで行かないとまちは楽しくならない。

次の日に訪れた龍仁市の高層アパート群の色彩は落ち着いた色調でまとめられていたが、住宅建設は速く、また老朽化した住宅を建て替える度に容積が上がり過密になっていく市街地は、都市景観としても多くの問題を孕んでいる。ソウル近郊の住宅を見ても、最近では景観法の施工もあり、ある程度色彩をコントロールして統一感はずくられてきた。一時のような不動産会社が住宅をブランディングして広告媒体として利用する外装色彩計画も減っている。韓国の住宅開発は日本よりも大きな敷地に、かなりの数の住棟を建設するために、敷地内のランドスケープは日本よりも充実している例も多い。しかし龍仁市の高層住宅で埋め尽くされた景観は、人々が快適に過ごすためには過密過ぎるように見える。ここでも経済性を優先する都市の問題がある。

廣州市と龍仁市での都市デザイン交流会が終わり、ソウルに戻った次の日、私は中央大学で開催された色彩学会のシンポジウムに呼ばれ、「最近の日本の色彩計画」について、景観法施行以降の日本の環境色彩計画の事例を紹介し、その問題点等も指摘した。このシンポジウムにはロシアから招聘されたDina Sin教授 (Novosibirsk State University of Architecture, Design and Arts) も出席しており、ロシアの建築と環境色彩計画について最近の成果を報告した。モスクワの環境色彩調査や、その調査データに基づいた色彩計画の報告は興味深い内容だった。ロシアの歴史的な建築物の色彩を調査し、ゾーンごとに配色を調整し

て景観をコントロールする手法はそれ程目新しくはないと思うが、歴史的な建築物を残し、その色彩を繋ぐように配慮された計画によって、考え方だけではなく、実際に眼に見える景観として成果を残しているように感じた。ロシアでこのような環境色彩計画が実践されていることを知ったことは、今回の交流会で得た大きな成果でもあった。



●龍仁市の高層住宅群

### 4 韓国の照明デザイン 照明についてもっと話したかった



近田 玲子

照明デザイナー / TDA 理事

韓国の照明事情についてもっと知りたいと今回の訪問に参加した。

2018年10月4日、廣州市の交流会の後、廣州市の担当者に案内されて市内の町歩きをした。学校の敷地に沿った通りが暗いので道路照明を増設する計画であるとのこと。鉛直面が明るいと通る人に安心感を与えるので、路面を明るくするだけでなく、例えば夜10時までは通りに面した家々の窓の遮光カーテンを引かないように取り決めてはどうか、と助言した。日本と同様、明るさと明るさ感の理解はまだまだなのかも知れない。10月5日の龍仁市の都市デザインフォーラムの後、焼肉懇親会が開催され、来年日本での再会を誓い合った。夜、ソウルへ移動。

ソウルの夜景レベルは高い。近代的ビルに組み込まれたコジャレタお店。切れ味よくライトアップされた東大門、漢川に架かるバラエティーに富んだ様々な橋の夜景が



●廣州市のまち並みを視察するTDAメンバー



●廣州市煉瓦の住宅街



●新宿のような、銀座のようなソウルの夜景

楽しめる。一方で、夜はオフィスの窓のシャッターを閉めるなど、光害に対する規制も設けられている。

2013年にK S L V E (Korea Society of Lighting and Visual Environment) 協賛第11回 Sustainable Healthy Buildings 国際シンポジウムに出席した。光害規制について、眩しさのない照明、サステナブル照明についての研究発表の後、城と石垣をテーマに発表して欲しいとの要望に沿った「街の特徴を明らかにする夜景」と題した講演をした。筆者の後に広大なソウル市をぐるりと囲む旧ソウル城壁の照明構想の講演をした、ソウルの照明デザイナー Yeon So, Lee が、なんと10月4日の廣州市の都市デザインフォーラムの講演を聞きに来てくれた。

光害とライトアップ。当時は、なぜ相反するテーマを同時に取り上げるのか違和感を覚えたのだが、今回ようやく一つの答えに行き着いた。韓国人は陰と陽を同列に考える人達ではないか、と。



●廣州市デザインフォーラム

**5** **日韓都市デザイン交流会・廣州市報告**

**中野 恒明**  
芝浦工業大学名誉教授  
アプル総合計画事務所・代表 / TDA 正会員

2018年の日韓都市デザイン交流会は10月4～5日の両日、ソウル近郊の京畿道廣州市(クァンジュ=シ・광주시、人口約30万人)と龍仁市(ヨンイン=シ・용인시、人口約100万人)で開催された。筆者の出番は初日の廣州市でのシンポジウム、要請された講演テーマは「歴史と文化に配慮した都市景観の形成」、市内視察と

シンポでの交流経緯を解説する。なおPPTは拙著「都市環境デザインのすすめ(学芸出版社刊)」の韓国語翻訳版が2014年に出版され、その翻訳文を書き込んだのが功を奏し、また流暢な通訳さんのお陰もあり、大いに盛り上がった感があった。

まずはソウル金浦空港で合流、前水原市(スオン)都市計画部長のチェさん達の案内で廣州市に移動、2014年にユネスコ世界文化遺産に指定された17世紀築の南漢山城(ナムハンサンソン: 남한산성)を視察、山上の城郭群の保存修復の成果、それも千年前の新羅統一時代に築かれた旧城郭遺構の上に存在していることの歴史の重畳さに感動、その一方で、麗の広大な駐車場から車社会に席卷されるソウル近郊都市の姿を予感した。

それは案の定的中し、廣州市中心部での環境整備計画のパネル図を携えての現地案内では幹線から裏道路への日常的な車進入などの安全上の問題解決が急務とのこと、あわせて進行中の旧市場跡地の再開発計画敷地周辺を視察、そのなかで周辺の生活感豊かな路地的境界の存在、それを構成する多くの年季の入ったレンガ住居群と道端で語り合う住民の方々の姿、この低層高密度の環境の是非について日韓の認識の違いが明確になったことも報告しておきたい。

シンポジウムの終盤に私なりにわが国での経験をもとでの総括コメントとして、①世界文化遺産都市の中心部における歴史的要素の保存の必要性、その意味では周囲の歴史を重ねたレンガ建物群とその境界の保存修復の可能性、②市場跡地の高層ビル計画と周辺市街地とのギャップ、その意味での市民合意の必要性、③生活道路にまで徹底される歩車分離の是非、欧州で始まるシェアスペース道路などの概念紹介、の3点に着目した。

質疑では案の定③に集中、利便性と安全性への懸念の声にやはり首都ソウルでの新たな歩行者重視の都市デザイン展開とは全く異なる近郊都市の車社会の現状の厳しさを知らされた。翌日視察の龍仁市も含め、幹線道路以外の補助・区画道路には歩道は無く、道路の両側は駐車車両で埋め尽くされる実態に、仲間の驚愕の声も上がった。

とは言え中心部には人々の生活の場が定着し、商店街は職住混在の雑然としたなかにも活気が漲り、半世紀前のかつての私の郷里のまちの賑わいの光景を彷彿する。わが国は明らかに近代都市計画の先進国とし

て、大都市は賑わいを倍加したわけだが、一方の地方都市はそれによって何か大きなものを失ったのではないかとの思いも強くした。その轍を韓国都市も踏まないように願いたい。果たしてその思いは伝わったのであろうか。

韓国訪問は通算すると10数回、ソウルでは13年前の清溪川再生を契機とした市内の歩行者環境重視型の様々な都市デザイン施策展開の先進性、それには感嘆する。わが国よりは先を進んでいるだろう。一方の近郊都市は様相は全く異なるが、中心部の「まちの賑わい」ぶりに、羨ましいと素朴に思ったのである。やはり私どももまちを元気にするはずの都市デザインとは何であったのか、その原点を垣間見たような気がする。



●廣州市シンポジウムの風景(壇上からの撮影)



●廣州市旧市場跡再開発計画の看板



●廣州市内路地裏のレンガ造の住居群

# 「行田市」その2

視点を变えて

城下町特有の「市街地中心部にJR駅が無い」行田市は、近代の水運中心から鉄道輸送網によるまちの発展からは取り残され、市街地中心部にもマンションブームは起こらず、足袋蔵は取り壊しても駐車場にするしかならないという消極的な理由で残され、日本一の隆盛を極めた足袋産業の遺構も、衰退産業の残骸として見られていました。

しかし、それらを他に類の無い文化的価値として後世に残し、町の誇りとして存続させるべき遺構であるとし、それらを活用するためNPO法人を組織しました。私達は「近代化遺産を活用したまちづくり」を目指し、市内に残った遺構を活用して活動をしています。

2004年から活用を始めた「忠次郎蔵」では、市内に6棟残る店蔵形式の建物を活用する事によって、地域の人達にその良さを知って貰おうと、手打ち蕎麦店として運営しています。活動メンバーを増やそうと手打ち蕎麦教室を開催、上級コースを卒業したメンバーを中心に日曜営業班を組み、そのメンバーが我々から独立して運営を始めました。

2005年から通常は見学出来ない蔵の内部を見て頂こうと、毎年「蔵めぐりまち歩き」を開催しています。これは蔵と蔵を線で結び中心市街地を面として捉え、まちづくりに取り組もうと行っているものです。また、使われていなかった足袋工場の建物を、工場の面影をほぼそ

のままに残し、「足袋とくらしの博物館」として同時期に開館しました。博物館では、足袋職人による足袋製作の実演を見学することが出来、実際の作業工程を見学出来る施設は限られていることから観光にも結びついています。

2009年、足袋蔵まちづくりミュージアムを開館、我々の考えるまちづくりを知って頂き、案内出来る観光案内所としての機能を持っています。

2013年に開館した牧邸舎は、アーティストシェア工房として貸し出し、直営で藍染体験工房も併設しています。

2016年には足袋とくらしの博物館に併設する牧野本店(店蔵)も女性のプチ起業応援施設として開館しています。

これらの施設は足袋蔵ネットワークが賃借し、維持運営しています。所有者には、「壊すことを少し先延ばしして頂いている」として「固定資産程度」の賃料をお払いし、借りています。

現在まで活動を続けている事により、我々の主旨に賛同し様々なご協力を頂いています。また、所有者の皆さんは、「自分の代で解体するのは忍びない」と蔵の保存に前向きに考えて頂いています。

これからも、私達の活動を通じ、行田市民が町を誇りに感じつつ、心地よい生活環境へ少しづつ歩んでいけることが理想です。



●足袋とくらしの博物館



●牧邸舎・Arts&Crafts イベント

## 景観ビジネス最前線

歴史の息吹 新たな鼓動...

日本の風景を次の世代へつなぐ インジェクト車道石張り舗装



京都市：花見小路通



大成建設グループ

大成ロテック

大成ロテック株式会社

〒160-6112 東京都新宿区西新宿 8-17-1 住友不動産新宿グランドタワー TEL.03-5925-9436

## ホワイトボード

今号は韓国との交流会報告が主になったが、巻頭文、ランドスケープ事情も韓国の方に執筆を願った。そこで感じた事は、アジアと欧米との都市のあり方の違いである。当たり前であるが、気候・自然の違いが文化の違いになり、その表徴である景観が異なる。

新たな都市景観のあり方を模索する今、アジア地域の国を超えた総合的なプラットフォームの必要性を感じ、拙機構が少しでもこれに役立てばと思う。また「地域から」にある市民を巻き込む試みは韓国での試みと相通ずる事を知る特集でもあった。



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。

(株)昌平不動産総合研究所 / (株)住軽日軽エンジニアリング / 都市環境デザイン会議 / (株)コトブキ / (株)都市環境研究所

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F  
Tel : 080-6722-4114 Fax : 03-3847-3375 E-mail : main@tda-j.or.jp  
http://www.tda-j.or.jp https://www.facebook.com/tda.public

【編集】(株)アーバンプランニングネットワーク | 2018121500